

せんだい郷土エッセイ 「郷六ものがたり」

郷六 — すぐそばにある村を歩く①

代々住み継いできた地域

仙台の大動脈として昼夜問わず車両が行き交う西道路。それが、小さな坂を下りて国道48号線の下をくぐり郷六地区に入ったとたん、しんと静かでのどかな雰囲気包まれる。周りを取り囲むおだやかな丘陵と、庭木の育つ低い家並みのせいだろうか。広瀬川の右岸、郷六沼田とよばれるあたりである。

郷六という地名を聞くと、藩政時代を通して城下町を縦横に走り仙台の暮らしを支えた四ツ谷用^{よつやよう}水を思い浮かべる人が多いかもしれない。広瀬川に設けられた取水口の四ツ谷堰はすぐ近くで、堀の一部はいまも保たれ水は工業用水として使われている。一方、もう跡形もないけれど、沼田には、4代藩主伊達綱村が元禄年間に建てた郷六御殿とよばれた別荘もあった。川が目の前に迫るお屋敷で、伊達家中の人々は春には梅、秋にはキノコと、季節季節の風物を楽しんだらしい。藩政時代から、歴史に登場してきた地域なのである。

郷六の暮らしについて教えてくださったのは、郷六の文化遺産等を護る会の庄子清さんだ。この地に暮らして4代目。初代は幕末の嘉永年間の生まれというから、実に160年に渡って住み継いでこられた。ご自身はいま80代半ば。この年代の方たちは機械化前の農業を身を持って体験されている。馬を使つての田起こし、手作業の田植えと稲刈り、屋根の葺き替えの材料となるカヤ刈りと山からの運び出し…。時期が集中する重労働は、近所同士が力を出し合いながら行うものだった。

「お互いさま」が生きていたことを教えられる。

話がお祭りに及んだとき、「宇那禰神社の秋祭^{うなねじんじゃ}りでは…」と庄子さんが口にされたので、驚いた。

資料によれば、郷六の宇那禰神社は、もう400年も前に芋沢に遷されたとあったから。遷座された後も、地元の方たちは神社を守ってこられたという。そこで、10月の祭りを訪ねることにした。

郷六は人が行き来した場所

いかにも鎮守の森の風情にあふれる小高い杉林の中に宇那禰神社はあった。氏子の方たちが急な参道を上っていく。地図でみると、この小字名は「宮」。神社が遷された後も、地元の人がお宮を守り通してきた歴史が見えてくる。

宮司さんの祈祷が始まり、氏子さんたちが順繰りにお参りをする。「毎年、餅つきをして芋煮汁を振る舞って子どもたちもずいぶん集まったのに、2年続きでコロナでできなくてね」と口惜しそうな庄子さん。さあ、と手まねきされ、私も手を合わせた。



10月第3日曜日に行われた宇那禰神社の例祭。稲刈りの済んだこの時期に長く執り行われてきた。

取材でうかがったと伝えると、何人もの方が次々と郷六の話をしてくださる。「神社の前のこの道が^{もがみこどう}最上古道だよ」「中世の郷六城は、向かい側の林の中にあったんだ」「郷六御殿のあとに行った？古井戸が残ってるよ」「青葉山にも通じてて、山の中を歩いていくとゴルフ場に出られるんだ」知らない話ばかりで、あわててメモを取る。



境内にある石碑群。水神様や山神が祀られ、塩釜詣の碑もある。

安達憲一さんのひと言が印象に残った。「郷六っていうところは、結節点なんですよ」結節点とは結び目のことだ。確かに、城下の内と外を、町場と在郷を、仙台と山形を結んできたし、いま地区におおいかぶさるような東北自動車道のインターチェンジも巨大な結び目だ。結び目は人やモノを呼び込む一方で、まだ見ぬ遠いところへ創造を飛ばしてくれる。話しかけてくださった方たちの中に、近年、越してきた方という方が少なくなかったことにも関係があるかもしれない。

神社が地域コミュニティの中心

「御神体のない神社をずっと守ってきたんだからねえ」と話すのは郷六町内会長の安達和郎さん。郷六町内会は、ここ沼田だけでなく川の対岸、葛岡墓地のある地域まで含んでいる。「川向こうには立派な集会所があるんだけど、何かっていうと神社に集まってコミュニケーションを図ってきたんだね」憲一さんも、「夏休みのラジオ体操も宿題も、神社に集まってやりましたよ」となつかしそうだ。いまだ葬儀などの際に手助けする契約講があるという話にも驚かされた。

1月14日、宇那禰神社のどんと祭を訪ねた。暗闇の中にゆらゆらと火が揺れ、近隣の方たちがお正月飾りを抱えて階段を上ってくる。誰もが火の番をする氏子や消防団の人たちにあいさつをし、ことばを交わしていく。「おばあちゃん、元気？」

「コロナだからね、施設行ってもガラス越しに字書いてやりとり」「足の怪我よくなった？」親し気な会話が耳に心地よく、燃え盛る炎は身の内まで暖めてくれるようだった。



どんと祭。氏子の方々が点火して火の番をしながら、お参りの人を待つ。

若いお母さんと小さな男の子が手をつなぎ、じっと火を見つめ動かない。どちらから？と聞くと、近くの団地の親子だった。いくつ？男の子がミトンの手袋をしたまま応えてくれた。どうやら4歳。ついにお母さんがしびれを切らし「もう帰りたいなあ」というのだが、「ぼく、まだここにいる」と頑なにひと言。ゆらめく炎はかたちをとどめず見飽きることがない。氏子の方の「いやあ、こういうご時世だから、火見てるだけで癒やされるねえ」ということばをいっしょに聞く。

火のまわりに地域の人たちが集まり話をする風景は、いかにも神社が地域コミュニティの中心にある、そのシンボルのようだった。たしかに、神社があったからこそ地域は長く固く維持されてきたのだ。ふっと我に返ると、もう1時間半近く経っていた。どんと祭の火を、こんなにもくつろいで暖かな気持ちで味わったことはない。

参道を下りていくと、先ほどの親子が田んぼのわきの小さな道を歩いていた。あたりは暗く、空には上弦の月。鎮守の森の赤い炎が、暖かな村の風景としていつまでもこの男の子の胸に宿るといい。